

序

私達の所で、人を評するに、日常的言葉であるが、現場向きの人間、研究所向きの人間という区分けが使われることがある。イメージとして、前者には、広く飛び回る、逞しい、大まか、などの言葉が当てはまり、後者には、繊細、緻密、間違いがない、などが当てはまるようである。

このように見ると、この両者の違いから遊牧の民もしくは狩猟の民と、農耕の民との違いが連想される。彼等の生活行動を見ると、遊牧者は牧草を求めて広く歩き回らなければならない。彼等には国境がなく、身軽く行動的である。狩猟者にとって、獲物は何処にいるか分らず、自ら出かけて発見しなければならない。果して何が得られるか、得られないか、予見できず危険は大きい。

一方、農耕者においては、収穫の対象は少なくとも自分の手の中にあり、自分では移動する必要はない。収穫がどれだけ豊かなものになるかは、専ら彼がどんなに心を配り、丹精をこめるかにかかっている。万一、不時の災厄が襲ってくれば、彼はじっと祈り耐えるより仕方がないのである。

ところで、なぜこんなことを書いたかと言うと、日本に技術の研究開発の面で、あまり独創的なものがないと言われる原因に、われわれのこの農民的性格が関係しているのではないかと思ったからである。その中でも特に、研究者にそうした性格付けを、自他共に与えているところに問題があるのではなかろうか。

研究とは一面、既存のオーソリティを打破する活動である。つまり、アウトロー的なものである。しかし、学会でもオーソリティに対抗するにはかなり勇氣を要する。下手をすると異端として黙殺されてしまう。これは農耕社会の性格である。しかしそれでは、新奇な獲物を得ることは、なかなか難しいのではないだろうか。

結論としては、研究者の性格についてのイメージについて反省して見ようということである。研究者と言え、繊細、緻密が全てということではなく、逞しく、冒険的な性格も必要であって、要は偏った先入主観を持たず、いろんな人がうまく組み合わせられているのが、生産的な研究所を作るのに大事なことであろうと思う。

1980年4月

清水建設株式会社研究所長

工学博士 鳥田 専 右